



〈歴史の道「峨山往來」〉

小雪が散らつくなか、市内の中心から気の向くままに車を走らせることおよそ40分。日本の原風景を思わせるような景色が目飛び込んでくる。七尾市でも北西に位置するであろうか。中島町藤瀬の周辺（鉦打地区）へとたどり着いた。

見渡せば、黒瓦にうつすらと雪が覆った家屋が建ち並ぶ裏手に、山々がそびえ立ち、家屋の手前には広範囲に田園が広がっている。また、平地の中ほどには、熊木川が静かに流れており、川を境に白く染まった田が民家に向かって段々畑のように並んでいる。山水が熊木川へ流れる自然現象にあわせてそのように作られたのか。足を止めて見入ってしまうほどである。

農家が多いためか、平地を田として最大限に活かそうとして、山林のふもとに住居を構え今日に至っているのであろうか、周辺一帯が同じように住居を構えている。

辺り一面が、雪化粧をしたことで寒さが少し身にしみるが、なにか心に温かさを感じる。田には、この辺で“稲にお”と呼ばれる稲ハザ（刈り取った稲をかけて乾かす設備で地域によつては呼び方が違う）を秋まで保管しておく設備が多く見られる。まだまだ稲ハザを使って米を乾燥しているのがわかる。

太陽の光と長時間の自然乾燥によつて収穫された米は、より美味なも

のとなるのだろう。少しでも美味しく食べようとすると、手間はかかるがこの稲ハザによる乾燥にこだわるのかもしれない。

こういった秋に見られる風物詩も、昔はこの地域でも見られた風景であった。これも時代の流れだろう。

鉦打地区では秋ともなれば、稲ハザにかかった稲穂の香りにより、“なつかしさ”を感じさせ、心が安まるような気がする。これが能登の姿なのだろう。

小道に入り、しばらく進むと、“藤瀬の水”と呼ばれる水が湧いている藤瀬霊水公園が見えてくる。

聞くとところによると、この水は、神経痛やリウマチなどに効果があると言われ、遠方からも多くの方がポリタンクをいくつも抱えて訪れて



〈藤瀬の水〉

いるようだ。一度この水を使って稲ハザでの米を炊いて食べてみたい感じが誘われる。主要地方道沿いは、穏やかに時が流れているようで、一歩脇道へ歩を進めると、大勢の来客で賑わっている。これもまた、独特な雰囲気醸し出している地域に思える。

また、主要地方道に平行して走る市道沿いに、2体のお地藏さまが置かれている。よく見ると、左手が欠けたお地藏さまと首の欠けたお地藏さまのようだ。

話を聞いてみると、「地藏さまのけんか」という民話がこのあたりに古くから伝わっているようだ。日照り続きの年に水をめぐる争いをする2人の百姓を守るために、2体のお地藏さまが自らの身体を傷つけることで人間ひとりの命を助け、周囲には地藏同士がけんかしたために傷ついたと伝えられているそうである。

平穏無事を祈って祀られているのだと思うが、このような昔話もひとつの文化だろう。「親から子へ」「子から孫へ」と語り伝えていくことで、その地域に民話や伝説として残っていくものではないだろうか。民話についてはこれくらいにしておこう。

鉦打地区では古くから伝わる伝統行事“鉦打郷土芸能祭”が思い浮かぶ。4年に一度、地区青壮年、婦人、児童たちが劇や踊り、伝統芸能を披露するのである。“演劇のまち”と